

父卯三郎と新島襄

——お父さんも、たしか同志社のご出身だったですね。

高橋 明治十八年九月に同志社英学校に入學しまして、二十一年三月に退學しました。

父の父、つまり私の祖父が亡くなったものだから、神学校まで行きたかったようだが、泣く泣く退學したわけです。

——新島先生の在世中ですね。

高橋 新島先生から教わったと言っていました。しかし、その頃先生はレギュラーではなくて、誰か他の先生が休むなどしたとき代理で教えるとか、朝の礼拝で説教されるとか、その程度であつたらしい。

——お忙しかったから。

高橋 これは父が書いてもいることだが、あるクラスの先生が休んだとき、掃除かなにかで校僕の松本五平さんがやってきた。それで私の父などが、「五平、英語で演説やれ」と言つたらしい。すると五平さんは、得意になつて、でたらめな英語演説をやった。そこへ新島先生が入つてこられて、「五平さん、何をやってるんですか」(爆笑)。五平さんは

新島先生の演説を知っているから、その真似をやっていたんです。(笑)

金森通倫のこと

——お父さんは新島先生から感化を受けられたようですか。

高橋 いや、いま言つたように、新島先生には余り接することがなかったから、むしろ金森先生です、非常に尊敬していました。金森崇拜で、影響もうけていた。

——金森が岡山の教会から同志社へ帰ってきたころですね。お父さんはどういつておられましたか。

高橋 「ロマ書」の講義を聞いたけれども、理路整然としていて、説得力があつて、自分もああいふ演説・説教ができたらいと、ひそかに思つたと言つていました。だから父は、新島先生の跡継ぎは当然金森先生だと思つていたようです。

——当時の同志社では、そう思われていたんじゃないませんか。

高橋 そうらしい、父ばかりじゃなかったようです。

高橋 虔名誉教授に聞く

神学教育の伝統

聞き手

河野 仁 昭



敬父高橋卯三郎氏

父と熊本バンド

——先生の奥さんは宮川経輝牧師のお嬢さんでしよう。金森先生のお世話で。

高橋 いや、紹介を下さったのは、桜美林学園の清水安三さんと、南大阪教会の山本忠美牧師だった。

——お二人とも熊本バンドじゃないですね。お父さんと宮川牧師は親しかったんですか。

高橋 そう親しいというわけでもなかったのですが、同じ組合教会の牧師だから、父は明石教会にいた時に、宮川を呼んだりしています。また宮川牧師の結婚式かなにかに父が呼ばれるとか。しかし、結婚の話は山本、清

水のお二人のお世話になりました。

——宮川牧師も金森などと同列で、新島の跡継ぎの候補者の一人では？

高橋 いや、金森先生ほどではなかったらしい。やはり、金森、小崎、そして下村孝太郎、横井時雄。多士済々だから。

——みな熊本バンドですね。

高橋 父は大阪の天満教会で、当時彦根から赴任した本間重慶先生から洗礼を受けたんです。父の親父は大阪の天満天神の近くに住んでいた職人で、家は余り豊かじゃなかった。それで、父は英語を勉強したくて教会へ習いに行っておって、本間先生にみとめられ洗礼を受けることになりました。

——本間は熊本バンドじゃないですね。

高橋 そう。父が言っていたけど、本間先生は、「熊本バンドの連中はみんな生意気で、同志社を自分たちのもののようにしている。組合教会もけしからん」と。父はそういう悪口を、本間先生から聞かされてきました。だから、同じようなことを言っていました。

——でも、熊本バンドのお嬢さんと、先生はご縁があつて。(笑)

高橋 昔は熊本バンド、反熊本バンドとい

った底流があつて、何かあると、それがちょっと表へ出てくるということがあった。私の家でいうと、父は反熊本バンド、家内のほうは熊本バンド(笑)。しかし、今はもう別になにもありませんが。

——それはそうでしょう。(笑)

高橋 熊本バンドの連中が威張っていたのは確かかなことのようにだ。小崎なども自伝に、同志社の授業はつまらないと思ったとか、蘇峰なども、新島先生の奥さんは外国かぶれでヌエミたいだとか書いている。

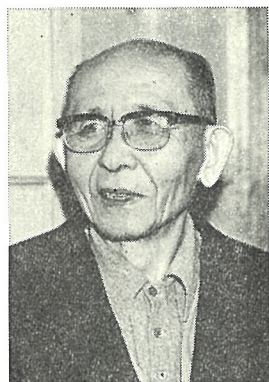
父と内村鑑三

——先生がお生まれになったのは、明石です。

高橋 そうです。父がそこで牧師をしておりましたから。

——じゃア、当然同志社へ進学するものと。

高橋 いや、かならずしもそうじゃないんです。父は明石教会を辞めて、神戸で『基督教世界』の編集長をやることになった。原田助先生が会長で。しかし、組合教会との間にちよつとごたごたがあつて、父は独立して伝



高橋虔名誉教授

をやったことがあります。

河野注「石川啄木の『明治四十年丁未歳日誌』九月十七日の項に、『夜、日本基督教会にゆきて演説をきく、高橋卯之助氏の『失はれたる者』路可伝の放蕩息子の話の研究にして少しく我が心を動かせりき』とあるが、高橋卯三郎と別人だろうか。当時啄木は札幌にいた。

近江兄弟社

——先生も東京に？

高橋 そう、私は早稲田中学へ入りまして。だから、父が関西へ帰らなかつたら、早稲田大学へ行っていたでしょう。

——お父さんは、どういうことで関西へ？

高橋 近江兄弟社のW・M・ヴォーリズさんに呼ばれたんです、「教会なしでは大変だから、近江八幡に腰を下ろしたらどうか」と。吉田悦蔵さんもいっしょに勧めて下さった。

——それで近江八幡へ。もちろん牧師としてですね。

高橋 そうです。ただ牧師と近江ミッションの役員を兼ねているわけで、給料の大部分は近江兄弟社から出ていました。昭和九年二月に「近江ミッション」は「近江兄弟社」と

名を変えるのです。

——先生はお父さんといっしょに近江八幡へ来られたんですか。

高橋 私は早稲田中学を卒業してから、二十歳ころに来ました。それから、父も勧めるものだから、私は同志社大学の神学科へ入学したいと思うようになったのです。そうしたらヴォーリズさんが、「神学校へ行くんだつたら、一年間伝道を見習ってからのほうがいい」というので、一年間、滋賀県のあちらこちらの日曜学校で教えたりして、大正十年に同志社大学へ入学しました。

W・M・ヴォーリズのこと

——ヴォーリズといえば「カレッジ・ソング」の作詞や、啓明館（旧大図書館）、アーモスト館の設計などで同志社とは関係が深い方ですが、どういう方なんですか。

高橋 ひとくちではいえないが、彼は宣教師ではないのです。

——八幡商業の英語の先生として、明治三十年代の終りごろ来日しますね。

高橋 明治三十八年の二月です。英語の先生でしたが、キリスト教の伝道を熱心にする

道するということで、東京へ行った。内村鑑三のように雑誌を出して、組合教会だ、何派だといった教派的なものにとられずにやっていこうと。それから八年ほど、東京を中心に全国伝道をやった。牧師の定職がなくて、苦勞が多かったようだが。内村先生とはわりあい親しい関係があつて、先生が出していた雑誌『聖書の研究』の初めの番号に論文を載せたりしています。

——内村に惹かれていたわけですか。

高橋 必ずしもそうでもない、父はやはり教会を重んじていますから。その点は違ふけれども、教会を辞めたときに内村先生が、「子供も二、三人いるのに、生活をどうするんだ」と心配して下さって、明治四十年に先生のご紹介で数か月、札幌の独立教会の牧師



大学予科1年C組（大正11年3月）後列左より5人目高橋名誉教授

ものだから、一年ぐらいでやめさせられた。そのあとは独立して近江ミッションを創立して伝道をやり、建築の設計をやった。

——ヴォーリスは、建築の専門的な教育は受けていないでしょう。

高橋 そうなんです。ただカレッジで建築

学のようなものを少しはやって、それで建築が好きになったと言っていました。だからボストンのMIT（マサチューセッツ工科大学）へ進学したかったらしいのです。

——どうして日本へ？

高橋 コロラド大学在学中、一九〇二年一月にカナダのトロントで学生外国伝道ボランティア大会があったとき、中国へ行っていた宣教師から現地の話を聞いて感銘をうけた。それで誰もあまり行かない所へ伝道に行きたいと思ったわけです。

——ご両親もいっしょに。

高橋 あとで両親を呼んで、両親とも近江八幡で亡くなった。ヴォーリスさんのお父さんは銀行員かなにかで、余り裕福ではなかったらしい。だから、彼は学生時代からありとあらゆるアルバイトをやって、それで独立心が養われたようだ。なんでも出来たのも、いろんなアルバイトをやったからだろう。

——なるほど。

高橋 物を売るにも、彼は自分が使ってみて、これはいいと心から思わなければすすめない。そういうセールスマンシップを学生時代のアルバイトで学んだわけで、それが日本

へきてから役に立った。それと独立心です。

——日本語は上手でしたか。

高橋 だいたい上手にしゃべれて、説教などもしていた。関西弁で「えらいこっちゃ」など（爆笑）。江州弁なんだ。

——変な外人だ（笑）。でも、あのような田舎の町で、よく頑張りましたねえ。

高橋 元来、あまり健康な方ではなかった。

——そうですか。

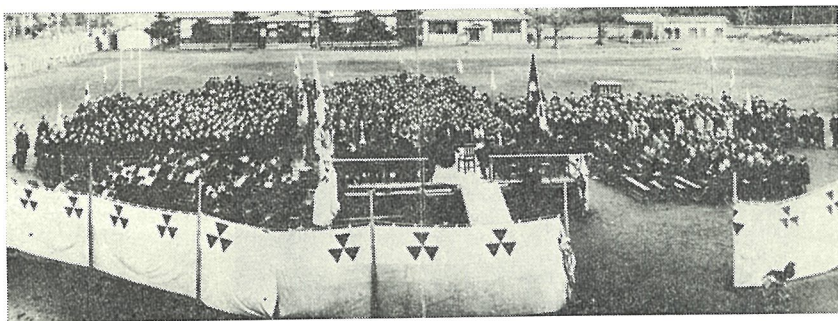
高橋 余り長生きはできないと、小さいとき医者にいわれていたらしい。

——そういう人だから病院をつくったり。

高橋 それからメンソレータムを作って売るとかね。吉田悦蔵さんとか村田幸一郎さんなどの助けもあったわけですが。

——吉田さんは、湯浅八郎総長の時代に同志社の理事をやりますが、同志社出身ですか。

高橋 いや、八幡商業だけです。学内のごたごたで湯浅総長が困っていたとき、吉田さんと懇意だった山下彬磨弁護士と中島今朝吾憲兵中將が親しかったから、中島中將に頼んでみてはどうかと、吉田さんが湯浅総長に言



同志社卒業式（大正14年3月）

った（山下弁護士の助言でだろうが）。そのサ
ゼッションに湯浅総長がのつて、中島中將に
来てもらった。それで法学部問題（上申書事
件）は一応解決した。吉田悦蔵さんは牧野虎
次先生から洗礼を受けていました。

D・W・ラーネッド先生のこと

——先生は同志社神学科で、ラーネッド先
生に習われたそうですね。昭和三年にラーネ
ッド先生は帰国されるから、晩年ですね。

高橋 私の本科卒業は昭和二年で、先生か
ら「ギリシア語」と「教会史」を教わりまし
た。そのとき先生はいまの私ぐらいの年齢だ
ったから、一方的に講義をするだけで、学生
の質問に答えてくれるというようなこともな
かった。高齢だし弱々しい感じもするので、
余り質問もしなかったけれども。だから、学
問的な感化というよりも、人格的な感化を受
けたと思います。おとなしい先生でした。

——授業は日本語ですか。

高橋 そうですが、明治調でして、「謹ん
でお聞きなされ」といって（笑）。それから
授業が始まり、「教会史」など、ノートにロ
ーマ字で書いてあるのを読まれるだけでし

た。
——学者としても随分いいお仕事をなさっ
ておられるようですが。

高橋 それはお若いごろのことです。

——明治の人なんですね。

高橋 私はイェール大学へ留学していたと
き、同志社をやめてカリフォルニア（クレア
モント）で余生を送っておられた先生に手紙
を出したことがあります。そうしたらお返
事をいただきましてね、先生もイェール大学
のご出身だから大変嬉しいといって。

大正末ごろの神学科

——ラーネッド先生以外にはどうい
う方が。

高橋 芦田慶治先生が部長で、片桐哲先生
がアメリカから帰られて間もないころでし
た。それから、宣教師ではアーモスト大学出
身のE・S・カープ先生。そしてB・F・シ
ヤイブリー先生などだった。

——カープ先生の担当科目は？

高橋 新約と旧約でした。あの先生は早口
で、ローマ字で書いたノートを読まれるの
を、学生は一生懸命筆記するのです。しかし



W.M. ヴォーリスさん

ラーネッド先生よりは若かったから、いろいろ親切に質問に答えて下さったし、講義の内容も充実していた。

——やはりローマ字のノートですか。

高橋 外国人の先生方は、皆だいたいそうだったと思います。ときどきローマ字と英語がチャンボンになったりするわけです。「カルタゴ」など「カーセージ」(Cartage)といわれるとかね、学生は「カセジ」てなんだと、耳で聞いたのではちょっとわからないのです。

——シャイブリー先生は何を。

高橋 「宗教教育」だった。

——専門科目ですか。

高橋 そうです。先生はごく家庭的な方で、ときどき学生を室町通りのお宅へ呼んで

下さって、コーヒーをご馳走して下さい、り、説教を聞かせて下さったりしました。

——室町通りのどのあたりですか。

高橋 今の室町ハウスです。先生は声楽家でもあって、同志社イヴなどにはバリトンで独唱をやられました。カープ先生はピアノを弾かれた。ハレルヤ・コーラスのむづかしい曲を弾かれましたよ。

神学科の学友加藤宗活のこと

——学生のお友達にはどういう方が？

高橋 私は昭和二年の卒業ですが、その年の神学科の卒業生は、私に加藤宗活君と二人だけ。彼は仏教徒で、のちに福山の稲光寺というお寺の住職になりました。

——変り種ですねえ。

高橋 自分は仏教徒だ、しかしキリスト教の神学もやりたいというわけです。そんなこととお寺から見放されて、アルバイトをしながら勉強をしていたようでした。卒業論文は禅宗の有名な「十牛の図」に関するもので。

——論文の審査がたいへんですね。(笑)

高橋 そのころ、河原町通りの京都ホテルからちよっと下った所に、M・F・デントン

先生がひらいていた日曜学校がありました。

——カトリック教会の近くですか。

高橋 あそこからちよっと上ったところ、近くに大黒屋という英語の本など売っている店がありましたが、その家屋をデントン先生が十二円ぐらいだったか家賃を出して借りていた。私はしばらく弟と妹と三人で、自炊をして住まわせてもらったことがありました。部屋が広いから加藤君を呼んでいっしょに住ませたことがあった。「毎日クラス会や」と言いながら。(笑)

——じゃア、加藤さんから仏教の話もきかれましたね。

高橋 聞きましたし、よく議論もしました。鈴木大拙の本に「十牛の図」を英文で解説したのがあることを最近になって知りましたが、私は学生時代に加藤君から聞いていた。だから、仏教のことは、彼をとおして私なりに理解していると思っています。

——課外授業ですねえ。(笑)

高橋 彼はまた、神学科の祈禱会ではお祈りもしました。牧師になるという連中が余り祈禱をしないのに、仏教徒である加藤君がや

——加藤さんもいい勉強になったでしょうね。

高橋 芦田先生のお考えだろうが、仏教徒であってもキリスト教神学を熱心に勉強する人ならいいということで、入学させたんだろう。当時は「仏教概論」という必修科目を、大谷大学の先生が講師として教えるに来てもらいましたからね。その点、同志社はリベラルなんだ。

——加藤さんとは卒業後もおつきあいがあったんですか。

高橋 ありました、手紙のやりとりとか。昭和三十八年に神学館ができたときには、彼は衣を着て訪ねてきてくれました。

四年ほど前だったか、福山教会へ行ったので、ついでに彼のお寺へも寄ったのです。そのとき奥さんに初めて会いました。奥さんは同志社女子大学の英文科の卒業生です。私が訪ねて行きましたら奥さんがたいへん喜んで、「私はお寺の住職の奥さんになったのですが、讚美歌をうたってもいいものでしょうか」というのです。私は「歌ってもいいじゃないですか、加藤君は神学校の卒業生でヘブライ語まで勉強しているんだから、キリスト

教についてはあなたよりよく知っている」と言いましたが……。加藤君は先年、その福山のお寺で亡くなりました。

神学教育の伝統

——いま、同志社はリベラルだといわれましたが、新島先生当時からそうでしょうね。

高橋 そ思います。新島先生もおそらく、真面目にキリスト教を勉強するのなら、仏教徒でもいいから来いといわれただろうと思います。

——自由を重んじられましたから。

高橋 ピューリタン式で狭いところもあったけれども、徳富蘇峰のような反抗的な学生を可愛がるとかいった面もあって。

——個儼不羈の書生を大事にしなければいかんと、遺言にもありますが。

高橋 そういう意味では先生はブロードだと思っています、その考えのちのちまで神学部に流れているわけです。キリスト教神学をやる者は仏教も知らなくてはいかんといいで、大谷大学の先生に来ていただいて仏教の講義をしてもらうとか。このごろでは同志社の先生が大谷大学などへキリスト教を教え

に行っています。そういうことは大学として当然のことで、お互いに毛嫌いなものはよくしない。

学生時代の二、三の思い出

高橋 学生時代のことでもう一ついい経験をしたのは、大学本科の一、二年のころ、大正十三年の秋から海老名弾正総長の秘書をしたことです。

——アルバイトで。

高橋 まあ、そういうものです、学生だったから。誰が推薦をして下さったのかは覚えていないが、総長のところへ来る英文の手紙を整理したり、総長が書いた英文の文書をカープ先生に見てもらったり。授業が四時に終ってから六時ごろまでやりまして、月給を二十何円かいただきました。そのころは三十円あればなんとか生活できたから、学生の身分で二十何円は高額だった。

——松井七郎先生も昭和三年に秘書をされたでしょう。

高橋 松井先生の前だった。大正十三年の英文の「総長報告」は、海老名先生にいわれて私が草稿を書いたのです。

——いまでは、学生にそういう仕事をしてもらうなんて、考えられませんね。

高橋 それから、もう一つ言っておきたいのは、寮のことです。あのころは左翼的な運動が学生の間でも盛んで、第三寮へ警察が入ってきたり、寮生が自殺するといった事件がありまして、三寮の寮生を全員出してしまつて、予科一年生だけ二十人ほど入寮させたことがありました。その中の一人に、のちに体育の教授になる田淵潔君がいました。

そのころ、退役陸軍少佐の、鈴木左馬太という熱心なクリスチャンが総寮長として招かれましたが、その鈴木さんから、私は三寮の寮長をやれといわれました。

——先生が何年生のときですか。

高橋 予科の三年でした。鈴木さんが「余り押しつけになってはいかんけれども、同志社の学生がクリスト教を全く知らんというのは具合がわるいから、何か教えてやってくれ」といわれ、私は夕べの礼拝のとき、波多野精一先生の『宗教哲学とその根本問題』をテキストにして、毎晩講義しました。

——時間はどれぐらい。

高橋 一時間。私はもつと続けてやりたい

と思つていたのですが、その翌年に母が亡くなって寮を出なくてはならなくなつて、いまでもそのことを残念に思つています。

——同志社は伝統的に寮で宗教意識がつかわれたり、感化を受けるんですね。明治末期に、及川八楼の感化で大塚節治先生が入信したり。高橋先生のような指導者が寮にいたんですね。

高橋 明治の名残りでしょう。よい指導者がいないと、放任じゃ駄目だ。放任になると、昔から寮の問題は絶えない。中学のほうはうまくいっていただけども。

留学とそれ以後

——イエール大学へ留学されたのは、卒業されてすぐに。

高橋 昭和二年三月に卒業して、その年の九月に行き、四年間いました。イエールはライネッド先生、原田助先生、牧野虎次先生といった先生方が学ばれた大学で、同志社とは関係が深い。ヴォーリズさんの奥さんもイエールの神学校で聴講したこともあつて、紹介状をもらつていきました。

——イエールはユニテリアン系ではないん

ですか。

高橋 そうじゃない。アームストとハーヴァードの中間ぐらい。新島先生も、アームストやイエールのような大学にしたい、しかしハーヴァードは困ると敬遠していたわけでしょう。おそらく、A・ハーディーさんから「ハーヴァードは駄目だ」といわれていたんだらう。ハーヴァードが余りにラジカルになつたものだから、アンドーヴァー神学校が分かれたわけですよ。

——留学から帰られてからは近江八幡に？

高橋 そうです。同志社の講師もしていたが、戦争がひどくなってから、牧野総長に、講師は全員やめてほしいといわれて、解職になりました。

——ひどい時代で、同志社はつぶされそうになりましたからねえ。ヴォーリズさんはずっと近江八幡に？

高橋 いや、軽井沢へ奥さんや母さんといっしょにひきこもつて、看視をうけていました。軟禁だなア。

——日本に帰化していたでしょう。

高橋 帰化していても駄目だった、アメリカ人だということで。あそこのラジオには短

波があつて、アメリカと交信しているとか、いろんな噂がとんだ。それで、嫌になつて軽井沢へこもつてしまった。しかしその間、東京の大学へ英文学を教えに行つたりしていたから、そういう自由はあつたようです。

——英文学などやれる人がいなかったからでしょうね、戦争中だから。

高橋 そうでしょう。戦後になつて、近衛さんからヴォーリズさんのところへ使がきて、「マッカーサーに会つてほしい」と頼まれたことがあつたようです。

——で、行かれたんですか。

高橋 GHQへ行つた。そしたらバートレット先生の息子さんが高級将校かなにかでそこについて、いろいろ便宜をはかつてくれたらしい。

——マッカーサーに会つたんでしょうか。

高橋 それは確かめられなかった。ヴォーリズさんとマッカーサーは、カンザスのレブンウォースの小学校で同級生だったらしい。ヴォーリズさんは体が弱くて余り出席しなかったし、マッカーサーはお父さんが職業軍人でカンザスの軍隊へ配属されていたんだが、しばらくして他へ替つた。余り長い期間では

なかったようだが、同じクラスだった。もし二人が会つていたらそういう話も出ただろうと思う。

神学部教授時代

——先生は、終戦後すぐ同志社大学の教授になられたんですか。

高橋 昭和二十九年に専任になりました。それまで、昭和二十六年から三年間、東京で「新約聖書」の翻訳をしていたのです。それもまた不思議な話で、もともと富森京次先生が行かれることになつていて、広島女学院の松本卓夫校長と、明治学院の院長だった村田四郎先生と三人が翻訳委員ということでした。ところが、富森先生は急に具合がわるくなつて、代りに行つてくれといわれたものだから。三年間缶詰になつてやりました。いま同志社や教会で読んでいる聖書は、そうして翻訳したものです。

——同志社は、聖書の翻訳には古くからかわりが深いですね、松山高吉、D・C・グリーン……。

高橋 それからラーネッド先生。翻訳が終つて近江八幡へ帰りまして、これからは同志

社の講師でもと思つていたんですが、その年に富森先生や、小田という若い先生も亡くなつて、「修士論文をみてくれる人がいないので、専任で来てくれ」と、大下角一先生がいわれるので、近江兄弟社の諒解をえて同志社へ来ることになりました。それから七十歳まで十九年ほど勤めました。

——教授時代で思い出に残っていることをなにか。

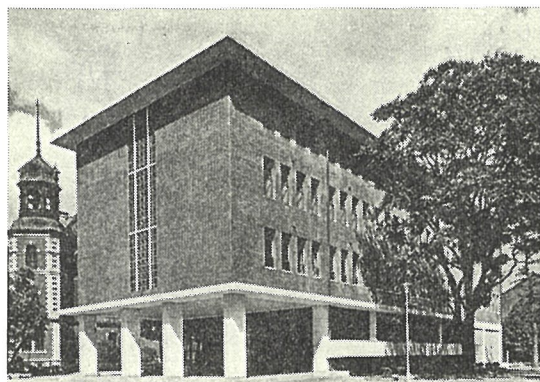
高橋 私が学部長時代に神学館が建つたんです。それから此春寮を新築してのちごたごたがあったり……。

——神学館は昭和三十八年ですね。あの建物の建築費は、半分、内外協力会かなにかの寄付だとうかがっていますか。

高橋 神学教育基金から、半分以上です。四半分ぐらいを同志社が出した。その寄付の折衝やなかでアメリカへ手紙を書いたり、なかなか大変でした。それから、あの建物に冷房をつけようということになつて、他の学部の建物にもないのにと、問題になつた。

——冷房は神学館が最初ですね。今はもう当り前のことになつた。

高橋 そのとき上野直蔵先生が学長をして



同志社大学神学館

おられて、「冷房をつけましょう。われわれも結婚式やら葬式やらで使わしてもらったから」といわれました。上野先生にはそういうところがありました。

——竣工してからは、夏期セミナーや夏期大学、夏休み中の会議室などに、私なども使わせていただきました。

高橋 他学部への授業にも使っています。しかし、建てる時には神学部が独占するんじゃないかという批判があって、その矢面に私が立たされたわけです。建ってしまうと言ったような具合だが。

——大塚節治先生が総長で、神学部の建物としては贅沢すぎるというておられたでしょう。

高橋 大塚先生は総長だったけれども、ずっと神学部の教授だったから、六学部中一番貧乏な神学部が、こんな立派な建物を建ててはと、他の学部の先生方に気兼ねされたんでしょう。(笑)

——三階の礼拝堂の入口の壁に、何か文字のようなのが見えてくるでしょう。

高橋 あれはヘブライ語で、「旧約聖書」の「創世記」の冒頭のところを書いてあるんです。誰の発案だったかは忘れませんが。

——今の神学部の学生には読めないでしょうね、私など皆目。(笑)

高橋 「この文字は何だろう、何が書いてあるんだろう」と疑問に思っ、これが読めるようになるかと奮奮する学生がいてくれるといい。そういう刺激になるようにと、それ

であのような文字にしたわけでしょう。

——デザインとしても面白いですね。

高橋 ヘブライ語は絵文字だから。Bはベツレヘムのベツ(ベト)ですが、あれは家の意味で家の形です。漢字のようなものだ。

——象形文字ですか。

高橋 そういふものです。エジプト文字もそうです。

——神学館ができて間もなく寮問題がおこって、それから大学紛争で。大変な時代だったですね。

高橋 そうです。折角同志社へ呼んでいたのに、本当の意味での教授の仕事は、余りできなかったと思っているんです。

——そんなことはなかったでしょうが、大変な時代だったですからね。でも、同志社の神学部はいまも健在だし、先生もお元気だしたいへん結構だと思います。

あとになってしまいましたが、『新島襄全集』の編集では大変お世話になりました。今日はまた、同志社の歴史上のいろんな人たちのお話までおきかせ下さって、本当にありがとうございました。

(一九八五年十二月二〇日、高橋名誉教授宅で収録)